

令和7年12月 教育委員会定例会議事録

1. 日 時 令和7年12月24日（水） 午前10時00分 開会
午前11時20分 閉会
2. 件 名 河南町教育委員会定例会
3. 開催場所 河南町役場 庁舎4階 大会議室南
4. 出席委員 教 育 長 中川 修
教育長職務代理者 西川 幹雄
委 員 藤原 充
委 員 杉田 みはる
5. 事務局職員 教・育部長 和田 信一
教・育部理事兼指導主事 城者 貴典
教・育部副理事兼指導主事 柏木 俊介
教育課長 藤井 康裕
教・育部副理事兼こども1ばん課長 渡邊 恵子
生涯まなぶ課長 木矢 哲也
給食センター所長 浅井 明郎

（審議内容）

教育長	それでは皆さんおはようございます。 今日は12月24日ですので、小中学校、もう終わっているかな。終業式がありまして。2学期の最終日。こども園の方も、石川さんはちょっと早かったことで、19日、幼稚園部の方が、先週の金曜日に終業式。 中村こども園さんは今日、幼稚園部。ただ保育園部はまだやりますので、保育園部が、両園とも、27とか、石川さんは29までとかね。まだまだやっています。そういう日になりました。 1年振り返ってみますと、年度で言うと4月からのスタートですから、まだこの年度は終わってない。ちょうど3分の2っていうところ辺なので、今日も、1つの案件の中に、2学期振り返ってというところがありますので、そこはまた皆さんといろいろ情報交換しながら、共有できる部分。それからまた、3学期以降に活かせる部分があればなと思っています。 ちょっと大きく振り返ってみますとね、やっぱ2025年。今年は、万博の年っていうのがやっぱり前半ね。これは教育の方、学校現場にも影響はありました。結果的に河南町は小中学校、3校とも万博見学に行くことはできました。いろんなご意見もありながらやけれども、総括して1つ、どうやったかなって、なかなかまとめにくい部分はあるけれど、間違いなくいえることは1つの大きな経験になったということはいえると思います。 どんなふうに感じたかっていうのは、人それぞれ子どもそれぞれだと思いま
-------------------	--

すが、けど、今回の万博は、1 つ未来というテーマがあったと思いますし、それは大事なテーマだなと思います。

なので、それをどうまた学習に取り入れていけるのかっていうあたりが1つ。万博、万博って、単体で終わらせるだけではなくてね。つなげていける部分はつなげていければなと思います。

あとは、昭和 100 年とかいう形で今年、令和 7 年度はスタートした。2025 年はね。思い返せば 1925 年、昭和元年から、平成で言うと今 37 年やったですね。そうすると 60 何年かの昭和、まだまだ昭和の世代は。でも自分もそう昭和生まれですけど、ここにいる方、基本、昭和生まれだと思います。

だけでも昭和の時間と平成の時間とのバランスや違いもあるだろうし、今は令和です。時代はどんどんどんどん変化しています。どんどんどんどん変化してその変化に追いついていくのが非常に難しいっていうふうにも感じます。

教育現場の方でも、やはり D X であるとか、或いはグローバルであるとか、そういったところの変化。

それと、人権的な部分でいうと、多様化。いろんなことに違いがあってもいいんだと、違いを認めていくっていう流れがそれは以前からもありましたけど、やっぱりここ、ずっと言われる。

でも、全体として少子化、多様化、グローバル化ね。D X。これが、やっぱりこれから 1 つのキーワードとして、挙げられてくる。そこにはやっぱり対応していく人間を育てていかないといかんなと思いますし、それで言うと 3 年目になりましたが、かなんビームでは、どういう力をつなげてね、つけていきたいんだっていうところ辺で取り組んでできているところです。

常に一生懸命、とにかくやってみる。自分のまだまだ出しきれてない力を出す。よくなればいい。それがビームの理念ですから。それをいろんな部分で振り返るときの視点にして欲しいなと言いつけてきています。それはこれからも続けていって欲しいなと思いますし、今日の 2 学期の振り返りもそうした視点も、ちょっと皆さん、意識していただきながら振り返っていただければどうかと思います。

それと、今年はインフルエンザとかいうとね、もうコロナも含めて、いろんなことの感染症対策っていうのは経験してきていますから。それでもやっぱり、今回もね、感染力がやっぱり強かった。学級閉鎖の対応もして、何とか乗り越えてきている。今ちょっと 3 校とも落ち着き始めているというふうには聞いています。

また不登校、いじめ、この問題はもう普遍的な部分で、やっぱり今もあります。しかしながら、あるということだけではなくて、それに対してどう取り組んでいくのか。できる限りなくしていく。そこに尽力していくってことは、今に始まった話ではないですが、そういう以前からの教育課題もあれば、今の新しい教育課題、或いは安全を守るっていうところ辺も振り返ってみると、いろんなことがやっぱりあった 1 年であるかなと思いますので、そこら辺を振り返ってみて、ビームの最後の M、メイクアップ。

	去年と比べてここは良くなったな、少しでもよくなったなっていうことが、1つでも2つでも、あればいいな、そんなふうに思っています。 今日の会議も大事にさせていただきながら、来たる3学期がスタートしていけたらな、そんな会にできたらなと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。 それでは、12月の定例会を開催いたします。 まず初めに、本日の定例会への傍聴につきまして、その申し出はございませんことをご報告いたします。 次に本日の出席者は4名です。定足数を満たしていますことをご報告いたします。 次に会議録署名委員は、河南町教育委員会会議規則第17条の規定により、西川委員に決定してよろしいでしょうか。
全員	はい。
教育長	ご異議がないようですので、会議録署名委員は西川委員に決定いたしました。 それでは本日は議案がありませんので、2、諸報告その他に進めさせていただきます。 まず、1つ目。令和7年度修了・卒業式及び、令和8年度入園・入学式について、事務局から説明をお願いします。
事務局	「令和7年度修了・卒業式、そして、令和8年度の入園・入学式の予定について」資料に基づいて説明。
教育長	はい。この件について何かご質問等ございますか。 僕のは、要は卒業式と入学式がセットになっているってことやね。
事務局	そうですね。ローテーション組んだときに、その卒入が一緒のところに固まってローテーションを組んでいくということになっておりますので、今回は、いずれも近つ飛鳥小学校が、教育長出席ということになっています。
教育長	皆さん、よろしいでしょうか。
全員	はい。
教育長	それでは無いようですので、次に2番目、20歳の集いについて事務局の説明を求めます。
事務局	「20歳の集いについて」資料に基づいて説明。

教育長	この件についてご質問等はございますか。進行上は去年と大きな変わりはないということですが。よろしいでしょうか。 では次、3 項目。令和 7 年度大阪府市町村教育委員会研修会について、事務局の説明を求めます。
事務局	「令和 7 年度大阪府市町村教育委員会研修会について」資料に基づいて説明。
教育長	はい。この件についてご質問等ございますか。 もう皆さん行かれるという確認でよかったですね。
事務局	もう皆さんご出席で回答を受け賜っておりますので。
教育長	よろしいですか。
全員	はい。
教育長	4 項目、冒頭申し上げましたが、2 学期の振り返りについてということで、まずは事務局から説明いたします。
事務局	「2 学期の振り返りについて」説明。
教育長	それでは、まだ 2 学期ということなのでね、理事からもありましたが、各学校園の訪問もさしてもらったので、その辺含めて、いかがでしょうか。 もう、どんどん出していただけたらと思うのですが。
委員	私から、よろしいでしょうか。 学校視察、授業の方の見学をさせていただいた中で、私が一番印象にあって、共感を持てたというか、ある程度子どもたちの成長を感じられた局面がありました。 それは国語の授業でしてね。ごんぎつねとかいろんな題材ありましたけれども、音読ですね。声を出して、読み上げる。そしてそれを、グループごとにテーマを決めて、いわゆるその作者の思うところ、ねらいは何かということを話し合っ、最後に先生がそれを評価するという授業の進め方だったんですけれども。 感じたのは非常に、3 年・4 年ほど前は、その音読でも声が小さかったのが、非常にハキハキとはっきりしたメリハリのある音読だなというふうに思いました。これが大きな成長かなと思います。というのは、やっぱりそういうふうに大きな声が出るというのは、ある程度自分に自信が持て始めたのかな。

教育長	よく言われるね、自己肯定感がつき始めたと思う。これは大切なことで、本当に自己肯定感が生徒の皆さんにつけば、もう本当にね、よく言われるアクティブラーニングという言い方しますけれども、興味があるものに自らどんどん動き出して勉強をし始めるという姿勢がついていくのでね。これが1つです。非常に感激した一面です。 個々の小さなことは、委員の皆さんも教育長もいろんなご意見あると思うんですけども、ちょっとマクロ的なお話をしたいと思います。 子どもたちの教育、私たち社会人もそうですけれども。よく言われる、認知能力と非認知能力という言い方、よく最近言葉を耳にしますけど。 これ私の主観です。当然、IQとか、テストの結果とか、数字で表せる、見える化できる認知能力。これと、見える化できない非認知能力をバランスよく子どもたちに育んでいく、これは大切だと思います。 しかしながら、社会に出たときに、正直申し上げて、学生時代にサインコサインタンジェントなんて言っていましたけども、すごく苦手でした。世の中に当然、いわゆるサインコサインタンジェントが仕事に役に立つかって、これ、正直言ってあんまり役に立っていません。僕はね。私自身の職責では、なっていません。 私が思うには、やっぱり、小中高というのは、自分が興味を持てるテーマ題材を探し求める旅なのだなという気がします。ちょっと抽象的かもしれませんが。 自分が興味を持てる、これはやれる、これはいけるという題材を見つける旅、道程なのかなと思い、大学に入れば、その見つかったものに対して、専門的な知識をみずから学ぶということは当然できている世代ですから、やっていくと思います。 社会に出たときに、私の人生振り返っても何が正しいかというと、はっきり申し上げるとウエイト的には非認知能力です。いわゆるIQテスト。見える化できないもの。具体的に言うと、やり抜く力、粘り強く頑張れる力、これをグリッドと言いますけれども、グリッド力。それから感情抑制力、自分の感情を抑制する。コミュニケーション能力、人との対話を円滑に進める。それから、いわゆる、目的意識、それと頑張れる能力ということも、すべてこれやっぱり非認知能力ですね。 この非認知能力が、やっぱり世の中に出たときに非常にものをいうし、悩み、壁にぶち当たったときに、これが役に立つと思います。これをいかに、小中高の間、幼児期も含めて大切ですけども、この非認知能力、僕は希望的には、もっと子どもたちに高めるような教育プログラムがあって、工夫してもいいのではないかというふうに思いました。今年は特にありました。以上です。 ありがとうございます。今、訪問を見て振り返って、音読の話も出ましたが、以前と比べて、良くなっているというふうなお言葉もいただいたのかなというふうに思います。
------------	---

委員	非認知能力、具体的な例を挙げて言っていました。関わってでも結構ですけど、いかがでしょうか。はいどうぞ。 今、委員から国語の話でも出ていたのですけども。最近、子どもたちが、なかなか漢字が書けないとかというのは、ひらがなを入れたらすぐに変換してくれる。だから、語彙力とかいろいろ課題出ている中で、今、そういうのやっておられるかどうかよくわからないのですけども、かつて、僕の経験では、視写ということをよく取り入れたんです。 例えば、詩なんかは、読むよりも、自分で教科書を見てその行で書いていくとか、或いは、ごんぎつねとかいう話が出ましたけども、そういうちょっと有名な作家の文章を、教科書を見て丁寧にノートに写していくこと、これ書写というのですけども。 そういう学習が、ちょっとまた、今はどうかかわからないのですけれども、昔はよく取り入れて、すばらしい表現をしているところには、子どもたちに赤い線を入れようとかですね、それをもとにして教科書の代わりのような使い方をして、少し時間かかるのですけども。 すべてできないので、学期に1回ぐらいは、そういうのを取り入れて、やっぱり書く経験を、たくさん何らかの形で、単に漢字の練習をするだけじゃなしに、文章そのものを書く。そのときに大事な点は丸とかをね、きちっと書くとか、いろいろルールはそれなりにありましたけども。そういうことを繰り返して、最後に感想文を書くとか、自分でよかったところは何なのかとか、作者の気持ちはどうなのかというような、まあ言うたらタイムスケジュール的なものを作って、ちょっと時間が、普段より倍ぐらいかかりますけども。 視写なんかは、どっちかいうと家庭で。学校でやらないで、家の勉強でここからここまでやってきなさいということで。やっぱり課題が明確になるので、家庭学習も割と。その間一生懸命取り組む子は、割と国語力が。語彙力がアップしたかどうかまでわかりませんけども。けども、そういう経験を積んだなということもあるので。いいか悪いか別にしてね。やっぱり子どもたちが書く経験を、いろんな手だてで増やしていくことが大事と違うかなというのはね。 最近、特にうちの孫でも。男の子、大学生がおるのですけども、今、しきりにAIを使ってやっています。だから、もう自分で書くというよりも、よそからとってきたものを書いているということがあります。ちょっと今、国語の学習でというお話があったので、視写とかそういう方向も1つ手だてとして大事と違うかなという感想です。
教育長	はい。非認知についてはどうですか。 今、委員からもご意見ありましたが。我々が今バランスよく、かなんビームの中でも、特に今年は。学力も大事、認知能力も大事、非認知能力も大事。 これを、委員も言葉で言うてはりましたけど、バランスよくと。まあまあ、確かにそうです。だけど、非認知能力の方が、より大事ではないかというふう

	なご意見もいただいたし、それをもっともっと具現化するために、いろんな取り組みをやるべきだと。 視察された中で、これは非認知能力を意識した取組やなとか、そんなん何か感じたことありますか。あまり授業1つ1つの中で具体的にというのはなかなか難しい部分あるかもしれませんが、何も授業は、数学の授業は必ずしも認知能力しか伸ばしてないというわけでは決してなくて、数学の授業の中でも、非認知能力に関わる部分っていうのは、例えばグループでとか、国語でもね、他の授業でもそうです。英語でもそうですし、それは、ミックスされているとは思いますが、何か切り離せるようなものでもない。というところもあるのですが、何かその辺、視察を通して、何かこれってこういうねらいがあったのかなとか、これ意識してはったのかなとか。
委員	ありますね。
教育長	どんなところですか。
委員	アメリカ人というのは、うん。非常にコミュニケーション能力が高くて、人前で発表するプレゼン能力って非常に高いんですよ。企業でのいわゆる発表を見ているとね。非常にスムーズだし、端的にポイントを指摘して自分の主張をまとめる能力すごいんですよ。 日本語って曖昧なところありますよね。ありますよね。ずばりイエスと言えないところありますよね。オブラートに包んだ表現ですかね。 思うのは、なぜそういうような社会、アメリカのものが出てきたのかということ。やはり学生時代に彼らは、徹底した小集団による討議を通したんですよ。グループディスカッションで鍛えあげられているんですよ。グループディスカッションに鍛えられて、そのまとまったテーマを30人ほどの教室の中で教壇に立たされて発表していくんです。そういうようなトレーニングをしているんですね。 僕が思うのは、やはり子どもたちの音読の声が高くなってきたというのは、最近見ていると、4人5人のグループでテーブルを固めて、グループディスカッションさせていますよね。あれが非常に影響していると思うんです。それをもっとやって、さらに発展させるためには、限られた授業時間なんだけども、グループごとに代表を決めて、7つのグループ、或いは7つのグループ代表一人一人に、前に立って演壇の上で先生の横で発表させるということをさしていただければありがたいと思います。
教育長	今のは音読ということで、言っではりましたけれども、グループになるという、その中でいろいろこう高めあったり感じあったりできる。それは非認知能力の続きになっているのではないかなとは思いますがね。 他いかがでしょうか。

委員	すいません。ちょっとなかなかその前の方の話を受けてっていうのも。
教育長	受けてなくてもいいですよ、全然。
委員	私が印象に残っているのは、討議会っていうか、説明を、プレゼンみたいなことを、近つの先生がしてくれはったときに、R80 でしたっけ、なんか 80 文字で、授業の振り返りを書くっていう活動があったなあと。それはすごく、私はすてきだなと思っていました。 そうですね。A I を使うようになってもしっかり自分の中に伝えたいことがなかったら、幾ら情報を羅列しても中身のあるものにはならないので。 何かの研修、ちょっと前の研修のときに、A I の話の講演聞いたときもすごく感じたんですけども。自分の中の、何ていうんですかね、考えとか思いとかをしっかり外に出すためには、本当に、やっぱり語彙かなって私も思うし、国語力ってすごく大切だなあと感じるの、さっき委員がおっしゃったみたいに、自分で声を出して読むっていうのもとても大事やし、そのあとに、そのやったことを自分で振り返って、アウトプットするっていうその作業がセットになっているっていうのもいいなあと。思って見ていました。
教育長	R80 今出ましたけど、あれのなんか、あれの良さというか、見ておられて、そのことを聞かれて、何かどんなふうに思われますか。
委員	これは近つの先生でしたかね。
事務局	近つ飛鳥小学校の今年の取り組みがアールエイティという形で。あれは、出だしはどこかっていうと、確かな学びの配置校が府の教育センターに集まる機会があったんですね。その場で、八尾市のある中学校の取り組みでした。それを小学校でやるために、6 年間発達段階があるから、1・2 年生は 40 字で書く。一文で考える。中学年はその間だから 60 字ぐらいになる。高学年の 80 字の根拠は何かっていうと、学力調査や、すすくウォッチなんかで、自分の言葉でまとめなさいっていったときに、おおよそ 80 字で。この 80 字の算出は何かって言ったら、おおよそ 2 文程度で 80 字になるだろうということで、80 字ということが設定されているらしい。 これを、今までやっている先生とやってなかった先生がおるんやけど、近つの取り組みの何がいいかという、それを校内全体、かつ、全学年で通してやることで、子どもたちの変容を見ましようよっていうこと。先ほど委員がおっしゃったような音読に関しても、ある特定のクラスだけがやっているんじゃない、それを学年としてやっていきましょうねっていうふうな、リーダーシップを発揮できる教員やコーディネーター的な役割を担う教員がいるかどうかで学校の様子がすごく変わってくるかなっていう形です。

	今、それがちょうど出てきたので、近つのにときにぜひ見てほしかったので、本当は授業を見ていただいて、最後のところで、子どもたちがその授業を通して、どんな振り返りをしているかっていうところが共有できたら良かったかなと思うのですけども、ちょっと来年度以降の楽しみにということ。
委員	R80 がね、本当にわかりやすかったですね。子どもにも抵抗がない。振り返りの中でね。だから、もう僕、いい取り組みやなと思って。
事務局	それから、委員の先ほどのご意見でいくと、とにかく今書くことへの、耐久力とか、ものすごく低いですね。文章書けない。 一方で、今の子どもたちは、驚くほど早くタイピングします。そやけど、驚くほど字が書けないってなったときに、その近つ小学校の先生が言うてたのは、やっぱり、その書くためのなんか忍耐力とかそういうのを育てたいっていうことで、80 字しぼりでいくと、最初はその 80 字、ものすごくこうハードルが高いんだけど、書いていくと、80 字じゃあ収まりきらなくなってくる。それはやっぱり、継続的に全学年でつなげていきたいっていうふうな思い。
教育長	今の話なんか聞くとね。やっぱり常につなげるってことをちょっと意識していきないうって思っているんですね。今単発、単発で聞くと、R80 そういう意味があっていいんだなって思います。思うんだけど、それは何のためにと委員もおっしゃられた。でも、それをしようと思うと 1 文 40 字で一文確認も、まず書きたいことがないと書けないわけで。例えばさっきの視写やったら、もう書くことは、前にあるわけやからそれを写すだけ。でもそれもスタートの段階では必要かもしれないし、さっきもそれこそ非認知で言うところの、我慢しながら忍耐強く、こうずーっと書くね、丁寧にひと文ひと文字と比較してっていう形では繋がっていくんだろうし。 そんなことは、認知で言うところの読む力とか、書く力にも繋がるけれども、非認知で言うところの、ちょっと丁寧に書こうとか、粘り強く最後まで諦めんと、綺麗な字で書こうとか、自分が一番綺麗な字で書けるとか、というのは、両方に繋がるような力でもあるし、でも、書きたいことは何なのかっていうことを常に、ね。そういうことを身につけて欲しいし。そのためにはどんな活動が必要なのかとか、先生だけの指導じゃなくて、それはさっきのグループの中で言うと、自分は思い浮かばなかったけども、自分の友達は思い浮かんでいたとか、そういう話を聞いたりすることで、刺激を受けたりとか、参考にしたりとかしてね、なっていくとか。 もっと言うたら、今でも新出漢字の勉強ってやっているよね。当然やっているよね。ほんで、その漢字を使って一文書こうとかっていうのもあったりするのかな。
事務局	そうですね漢字ノートと呼ばれて、そういう形になります。

教育長

それってものすごく短い。山の勉強をしたとしたらですね、僕は、昨日、山へ行ったとかで、丸打つわけですね。僕は、昨日、山へ、行った。これも十二、三文字になる。それこそさっき言った1年生とか2年生とか、習い始めの頃って言ったら、1文とは10文字とか15文字ぐらいかもしれん。

それって、漢字の勉強のときにも、その機会はあるわけですね。あるわけですよ。そこら辺は、先生も子どもたちも意識して、マルがないときには、それは、先生が丁寧に丸を付ける指導を丁寧に粘り強くやるとか。

必ずそこは、ちゃんと一文を常にかけてくる勉強をしていると。そのことの積み重ねが、もうちょっと学年が上がる、発達段階が上がれば、一文が20文字ぐらいになるかもしれない。そんな二文書いたら40字やん。ほんなら5・6年でやるところのすくすくウォッチとかでも、80字だってそんなもんしれてんでと、自分らがやってきたことの積み重ねで三文書きゃあええやんか。一文が20文字ぐらい書けるんやったら、30文字かけるんやったらっていうふうな。

それってじゃあ、いきなりそれをやっているから、R80だけの取り組みかとかでなくて、日頃からのそういう積み重ね、繋がりがあるっていうことを、先生たちが1人じゃなくて、さっきも指導主事が言ったような、それは学年でやろうとか、学校でやろうというリーダーシップを発揮する。

今まででもそういう場面ってのはあるし、校内研究ではそういうことでね、今年は書くでいこう。その代わりこの書くでいくためには、みんなでこれやっていこうよっていうのが校内研修の1つの流れだと思うので。

今まででもやってなかったんかって言ったら、やってないことはないけど、統一感なり、みんなでそろってやろうっていうところは、それはまちまちであったかもしれない。それが、例えば近つで、今そういう書くこと、いろんなことができ始めたとしたら、桜は桜でやっている。それをまた、俯瞰して、2校を見ながら、ちょっとお互いこんなことやってはるでっていうところ辺で言うと、刺激になったり、取り入れあったり、町全体で。それがその1つの成果の表れが、学調であったりすくすくウォッチであったり、だから何もすくすくウォッチ対策とか、これ今までもね、今年も、あと1問にこだわるっていう取り組みをやっているんですよ。

やっている中でいうと、何もテスト対策ではなくて、今言うてるような皆さんも見ていただいた1つ1つの授業の中の、この部分で、こういう取り組みやっている、これはこう繋がってこう繋がっていけば、最終的には学調にも影響は出てくる。学調でもその力を発揮して表現することができるとか。

何かそういうような繋がりを実際、ね、ご覧になって感じてはる部分を、何か整理していくとそういうことじゃないのかな。それをまた学校とも共有するとかっていうことができたらいいいのかなあと思ったりしますね。

他、その視察だけでなく結構ですし、はいどうぞ。

委員

ちょっと非認知能力に関わることなんですけども。決めることの重要性とい

うことでね、ちょっとその辺のテーマでお話したいんですけども。

皆さん方ご存じの日本テレビのみうらアナウンサー、結構テレビにも出て、なかなか優秀な方だなと思って、その方がある対談で、自分のことを振り返って、小さいときから、決めることが誰よりも早かった。

友達の中でも、それは学生時代、或いは大学を出て、アナウンサーになってからもね。自分の力となって生かされている、ということを書いておられたんですね。決めることイコール責任を持つことと言うのかな。要するに、言った、決めたからには、自分で、モチベーションを持ってやっていこうという力になるということですね。

実は、今子どもたちの中にもね、僕の経験では、何か物事を決めるときに、なかなか決めることができない子ども、これ結構いてですね。もうAかBか選ぶのでもね、迷ったりしてね。或いは自分で、グループで、どんな役割をしたいかというときとかでもね、なかなか自分の意見を言わないで決めることができなかった。ひどいときなんか友達にね、お前これやとかですね、言われて決めたとかいう、そういう、自分でなかなか決められない子どももまだまだ結構いるのと違うかなあというのがね、このみうらアナウンサーの対談を聞いてちょっと感じたんですね。

で、自分で決めて、行動することがね。自分で決めて行動することが、どれだけできているのかな。普段子どもたちの生活見ていたら、例えばお父さんやお母さんが決めたとか、学校ではもう先生がこれしいとかですね。言うたら、自分が決めたのじゃなしに、相手に決めさせられたという状況の中で、本当にモチベーションが上がるのだろうか、今ちょっと感じたところなんです。

実は学級の中ではね、例えば、学級の目標をみんなで決めましょうとか、或いは、今度運動会どんなこと頑張っていくのか、それみんなで決めましょうとか、或いは、お楽しみ会するけども、みんなどんなのがいいかなあとかね、実は学級の中でも、子どもたちの力で、決める機会って結構たくさんあるんです。

でもね、この決める、僕も特別活動やっていたんですけども、子どもたちの力で決めさせるというのは、とても大事なんだけどね。時にね。時間と暇がかかるんですよ。ものすごいエネルギーがいる。なんでかって言ったら、もともと子どもたちにすべて託さなければいけない。

もう先生ができるだけ口出ししないようにして、やっていかなければいけないんですけども。例えば反対の例で言うたら、お楽しみ会、男の子は、もうソフトボールするかとか、先生がね。女の子はもうドッジボールでいいとか言うてね。それでも、子どもたちは、結構頑張って一生懸命やるんですけども。

でも、ここでのいう決めるというのは、やっぱり自分たちで相談して、何をしたらいいとか、どういう目標を決めたら、学校生活或いは学級の生活がよりよくなるよとか、そういう、もうものすごくポジティブな目標に向かって、決めていくという力をね、やっぱり子どもたちにつけてあげることが大事と違うかなあというようなことをちょっと思いました。

自分たちで決めたこと、自分たちで決めたことに対する責任とか、モチベー

	ションを高めて、それこそ非認知能力の、みんなと一緒に協力して活動していくとか、或いはやり遂げるとか、だから、どんな小さな目標でもいいんやけども、レベルが低くてもいいんやけども、みんなで決めたことを達成する経験をね、できているのかなあというのがね、このみうらナウンサーの決めるということにこだわってね。 だから、できたらですね、平素の学校生活の中で、自分で決める習慣とか、みんなで相談して決める、そういう訓練的なことをね、やっぱりちょっと取り入れていかんと、大人になってもなかなか決断力のないになるんと違うかなっていうのはね、ちょっと感じたところなんです。 だから、ちょっと今日は決めるということにこだわって、非認知能力を高めていったらどうかなという。そういうちょっと提案なんですけどね。 私、今のお話、非常に共感ですね。 今のお話を一言でまとめると、私自身大切にしていることがありましたね。小さな習慣を持つということなんです。 非認知能力を、家庭内で育てる。その決める力、意思決定能力を高める、家庭でできること実はあるんですよ。何かというと簡単なんです。 これ本当に親御さんが気をつければ、今言った決める。おっしゃった決める力、決定する能力ついていきます。 簡単なことです。どういうことかという事です。選択や決定を日常生活の中で子どもに任せる。簡単に言うと、着ていく服を子どもに決めさす。遊びも今日何しようかってのは、お父さんお母さんが決めないで、誘導しないで子どもに任せる。ということなんです。 そういうことを、私は日常の小さな習慣と呼んでいるんですけども、子どもに決定権・支配権を任せるというトレーニングを幼児期からすると、今おっしゃった能力って、身についていくということです。非常に共感します。
委員	決められない内閣とかね。やっぱり大きな政治の社会でもね、なかなか決めるというのは難しいんやけども。だけでもやっぱり、そういう、子どもたちの小さな時からね、やっぱりそういう習慣を、つけてあげて欲しいなって。 もう1つね。その話し合いのときに出たんですけども。子どもたちで小さなグループでやったら、まず2人で、グループで相談して、物事を決めていく。次には、4人とか、小グループで決めていく。次は学級の中の問題だったら学級会という組織を使って、皆で決めていく。学校全体やったら、児童会とか、中学校やったら生徒会とかというところで決めていく。 地域で住んでいたら、隣組の問題やったら、隣組の皆さんと相談する。或いは、河南町の問題だったら河南町の組織という、要するに小さいときから、お互い相談して決める習慣をつけていたら、例えば環境問題なんかやったら、世界の人々と話し合っていくというように。 話し合うということは、相談して決めるということは、小さいときから最初

委員	は 2 人からスタートするんやけども。だんだん広げていって、やっていくというそういう力があるので、そういうことを、何か先を見通したようなことができるという力を子どもたちにね、将来学校を良くしたり、地域を良くしたり、日本を良くしたり、世界を良くしたりする。 その元になるのが、最初 2 人で話し合う。相談してやっていくことから始まるというようなことをね。だから、子どもたちに教えてあげたらいいかなという気はいつもしている。そうですね。 やっぱりね、認知能力・決定能力が長けてる方のいわゆる対比する言葉としてよく言われるね。優柔不断っていう言葉。二者択一、どっちしますかという時にいつまでも決定できない。これではリーダー務まりません。正直言って、これが危機管理能力にもなるんですよ。 河南町にバーンと災害が来た、どう救助するかいうときに選択肢が 2 つあったときに即断しなきゃいけないリーダーというのは、これがそうですよ。 意思決定能力の速さですよ。やっぱりリーダーに必要なのは、今おっしゃった能力って非常に大切ですわ。即座に即決するという。ただし、自分のいわゆる卓越した体験と、これは間違いないという心理に基づいた決定ですよ。誤った方向にもっていったらとんでもない事になりますからね。 それはやっぱり今言ったように、幼児期の教育ほど大切なものはないと思うんですよ。本当にね、物心ついた頃から、子どもたちに意思決定を任せるといふね。 やっぱし自分自身考えても、子どもにやっぱり出かけるときに親御さん服着せていましたね。これ着ていき、これ、これとね。そうじゃない、今やっとな、この年になってね。ああ間違った、そうだったなと思いましたわ。
委員	親とかね、学校の先生のやってきたこと、逆なんです。実は、
教育長	どうですか。今のその決めるという話。
委員	そうですね、家庭内で選択と決定を子どもにさせるっていうのは、私自身が結構意識してきたことでもあるので、共感すごくできます。 ただその、自分の個人の意思決定っていうのと集団の意思決定っていうのは、繋がっているけれどもおそらく同じものではないので、例えば、そのチームでこれをやっていくって決めたら、多少自分がちょっと違う考えを持っていても、そこに自分も注力して同じ方向に向かってやっていくっていうのはすごく大事やし、その力を持つことでもあると思うので、そのさっきのその近つ小の先生の取り組みっていうのが、学年を跨いで全学年で教科を跨いでっていう。何ていうのですかね、1 つの方向に子どもを引っ張っていきこうっていうそういう働き方っていうのは、私すごく何ていうのですかね。1 人ではできないことなので、そういうことはやっぱり学校の中で、学んだり、その楽しさを味わったり

教育長	して欲しいって、その集団の中では、そもそもで、もちろん決めることが大事。 みんなで決めることが大事やけど、みんなで決めたときに全員が同じ意見になるっていうことはありえないから、その中での落としどころをつけて、みんなで 1 つの方向に向かっていくような集団づくりができればすごく素敵だなあって思いながら聞いていました。 ちょっと覚えてはりますかね。このかなんビームの取り組みの中で、1 年目去年、今年もやっている、来年令和 8 年、一応最終年度と決めた場合に、これ、委員も言ってはったかな。何かちょっと子ども代表というか、いわゆる議会的なサミット的なことができないかみたいなところ辺、うーん、まさにその自分の思っていることを考えていることを、みんなに表明するってことですね。当然その場合には、言っぱなしではいかんから。聞かなあかんし、いや言うってことはそれだけ自分の意見持っとかなあかんし。でも、それがなんか花火的に、その時だけ、議会やねんとか、サミットやねん、ほんなんやっても意味ない事なので、そのためにやるんか言うたら、今皆さんが今日、わりかしこう話の中で言う、子どもにどんな力つきたいんや。やっぱり自分の考えしっかり持てる、持っている子、持つ子、それを伝える子。それが判断っていうことにも繋がるし、それがさっきの決めるってこととかあるいは選ぶってことですよ。 そうやってきたら、じゃあそれいつすんのとやってきたら、おっしゃっていたように、家でもできるし、学校でもできるし、そういう経験の積み重ねが、小さな積み重ねが習慣になり、それが目指す力に繋がっていくんやで。そういう意識を持って先生たちも、授業組んでみ、子ども見てみ、となればいいし、子どもたちもそれが意識的になればいいし。 あの、今年、特にこの 4 月から校長先生 3 人とも替わりましたでしょ。だから、彼らに言ったのは、大きな変化やから、それチャンスに結びつけなあかんっていうのと、ずっと一貫して今年言ってきたのは、子どもの意見ちゃんと聞いて欲しいということ。 そのためには、さっきおっしゃっていたように一定任さなあかん。任さなあかん、だから、1 つのあれはね、よく今言われたけど、学校の決めごとと決まりごと、あれもう 1 回見直して。怖いですよ。子供が全部決めたらって言うたら、それはどんなことが出てくるかわからへんけど、一定任す。或いはそこには時間がかかるかもしれない。手間隙かけることも大事だし、そやけど、さっきおっしゃったけど、絶対に自分の持てることみんな言えたら、まず、それだけですばらしいことやけど、あとは絶対それって違いがあるわけやから、別の視点で違いは認めなあかん。けども決めなあかんことはある。 ほんなら、やっぱりこれでって言うていろいろ論議しながら、でも、じゃあこれでいこうと決めたら、それが一番初めに自分の思っていたのと違って、みんなで決めたんやったらやっていこう。 それが、例えば学校の決まりなんかでも、今までやったら、先生が決めたのがベースになっている。僕は別に先生が決めることを否定しない。絶対大事だ
------------	---

し、先生ってそういうことをわかった人がやっている。けども、その時の決定の中に、どれだけ子どもたちの意見を取り入れているのかとか、子どもたち自身も聞いてもらえたとか、僕たちも意見言えたんだという感じ方をさせてね、今年。そういう場면을どんどん意識的に作り上げて、年度の終わりに、子どもたち、先生のところの学校で、子どもたちは、自分たちの言うことを聞いてもらえる。例えば、アンケートの項目に1つ出た場合に、どんなふうになるのかなあ。数字だけが目標じゃないけど、聞いてもらえた。先生に聞いたら、いや、聞いていますよと。絶対子どもたちの意見聞いています。10人に聞いたら8人・9人は聞いていますっていうけど、子どもの10人の中で、自分の意見聞いてもらえているかって言ったら、ほんまに、10人・9人になるのか。ていうね、その辺が、もっと目に見える形でやることも大事やと。聞いてる聞いてるっていうてもあれやし。

実際それをどれだけ聞き、ほんなら、小さな積み重ねで決める場面どれだけ作っているのか、選ぶ場面どれだけ作っているのか。ね。さっきの服の話、これ言うてた記憶もありますし、特にそれで言うとな、傘持っていくか持っていくへんかとか。天気予報は、自分で見るような習慣を家でつけてくださいよ。ほんで、高学年ぐらいなってきたら、今日はこれ、傘がいるなという自分で決めて自分で傘持っていく事ができたら一番素晴らしいし、でも、そんなん毎日の積み重ねやし、学校でもいえるし家でもいえますよね。

実際にできた子どもおったら、そのことを、価値づけて褒めてあげたらいいし、そういうことが広がってきたら、今年の初めにおっしゃられた、そういうことを粘り強くやった先生たちすごいね素晴らしいねって、先生を褒めることができる。何かそういう循環になっていけばいいなあと思いますね。

2 学期振り返っての場面で皆さんがおっしゃっていただいた意見は、何かそんな形で、また、学校の校長には伝えたいと思うし、残り3ヶ月間でそれができるかどうか。やってきたんやでっていうことがあるんやったら、それまた出して欲しいし、とか。そんなふうになれば、目指すところは、何かやっぱりぶれずに一本化していく。

そんなことひいては、学調にも繋がって欲しいし、他の場面でも繋がって欲しいし、あるいは、体育大会とか、他の一般地域の方・保護者の方に見ていただいたときに、また違う感じがしてくれるんちゃうかな。いうふうに思うので、来年1年、そんなことができたらいいなと。

今また指導主事なんかも考えてくれているんやけども。うちの課長とか、来年のこともいろいろ考えた中で、ちょっと議会的なことはやりたいなと思っています。時期とかも含めて、でもそれは花火に終わったらいかんから。

そのために、今までやってきたんやったらやってきたこともリンクさせながら、ね、やっぱ話し合い活動とか、それも大事だし、そういうことをきっちりやっていってそこへ持っていきたい。

それで終わりじゃなくて、それが9年・10年と繋がっていくような。しっかりした力になっているで。やってきたことに意味があったよ。で、学校も褒め

委員	る先生も褒める。それまた褒めてもうたら、それが力になってまた前進んでいくような、流れをつくれたら、いいなど。 一つだけね。うん。決められたことで、今、集団で決まったことは、もう自分が守らなあかんという、それね、実はね、1 人のリーダー的な子が出てきた時、そういう決まり方にすることが多いんですよ。残念ながら。 そこでね、ちょっと注意せなあかんのは、1 つのことを決めるんだけど、それに向かって、いろんな思いのある人がいる。或いは、仲間がいるということを理解させなければいけない。理解させなきゃいけない。 例えば、子どもたちで話し合いして、反対の子、こんなことで反対やと思っている子もいるということをもみんなでオープンにして、その思いを受けてね。でも、決まったことをやるんですよ。 だから、保護者でも、こういう思いの方がおられるということを受けて、先生が教育するのと、何も知らないでやるのとは、全然、方向性が、変わってくるので、だからそこはね、もしも、今働いているとこでね、僕はこんなん反対やのにと言うけどね、言うたかて、その時の自分の思いをきちっと伝えて、それを受けとめてやっていけるような仲間づくりというのか、集団づくりというのか学級をつくっていくということがね、基本ね。だから、独裁にならないようにいうことを、いつも我々は配慮しとかんと。どういう思いの人がいるということをもっておかないといかんということね。だから、それは子どもたちに僕は伝えてあげて欲しいのです。俺はそんなん反対やねんけどと言うたときにはですね。
委員	なんかそうやってそれを、反対やっていうのを出せる環境を作って。それを受けとめた上で 1 つに決めるっていうのは、もうそこは、どうしても仕方ない部分はあるけれども、やっぱり出せるか出せないか、受けとめるか受けとめられていないかっていうことは、ものすごく大きいですよ。
委員	例えばね、学級でお楽しみ会しようというたときに、テーマ、目標が男女仲良くであればね。俺、ソフトボールしたかったんや。男だけでやりたかったんやと。或いは、私らドッジボールしたかったんということがね、通らない。 なんでかって、目標はそういうことやから。だから、そういうことを踏まえてね。やれるということ、何でもかんでも子どもの思いじゃなしに、そしたら、男の子も女の子も交えてできる、何かスポーツを考える。高学年でキックベースボールやったら、女の子もできるとか言うてね。やるんですよ。 ほんならそういうふうなことやしたらね、男の子が女の子の指導をしたりルールを教えたりとかする。だから、いい環境ができるんやけども。それを単に、先ほど言ったように、先生がもう男の子ソフトボール、女の子ドッジボー

	ルにするとかいうふうなやり方をすればね。
委員	もって行き方がすごく大事ですね。
委員	だから、ほんまにちょっとしたことやけども、指導者が、配慮することであつて、子どもで随分変わってきたりする。そうなってきたら、子どもたちのトラブルもなくなってくるというような多くの実践があるので。 そういうの、決め方は難しいんやけど、そういう少数意見も十分に組み込んだことを考えてやっていこうという、システムにするのがね。
教育長	その辺を、例えば、DXをそこに絡めるとすると、なんぼ2人でも、なんぼ4人でも言えないタイプの子とかがいているのが、今はそれを言われへんけど、打つことができ、共有することができるんやっていう、それはそのタブレットにそういう今までいない側面があるんやったらタブレット上手に使ったらええやんか。 うんと瞬時に手間かけずに、みんなで共有できるんやったら、そういうタブレットの使い方を、先生も子どもも知っていけば、今までやってきたね。先生もやってこられたところの、やっぱり大事な不易の部分。プラス、そこに今の流行というか、そこをうまくミックス取り入れていきながら、ね。だから昔はこうやって大事だった。今でもベテラン層はそういう思いを持っている人もおるんやけど。だからタブレットは、もうええねんじゃなくて。いや、そこにタブレットをうまいこと取り入れていくことで、もっともっとあんたのやっていることすごくなるやんかというふうな思いも共有できたらええやろし。 その辺が、やっぱさっきちょっと途中も言ったけれども、こういうときもそうやし、皆さん自身もそうやし、今日の事務局のメンバーもそうやし、学校のみんな一人一人が、どこかでやっぱこれとこれはつなげられるとか。これとこれはつなげていくな。それは河南町の今の教育委員会のキーワードやから、つなげていくことで、大きなものを目指していくっていうね。 それをこうね、実際の実務を通してとか、こんな話し合いの場も通しながら、みんなが体験しながら、こういうていけるようになれば。僕自身は考えているのは、そういうふうな河南町の道筋。 こういうふうな論議しながら、こんなふうなまとめ方しながらこんなふうにつなげていきながら、みんなでやっていくんやなっていうことが、来年もってね、具現化していけばいいかなとは思っています。そこへDX取り入れる、多様性、グローバル、いろんなキーワードがやっぱりあるので、それも、これは関係ないとかじゃなくて、これをどっかで結びつけて、これもそうやね、それもわかっているねんとか。 そのためには、雰囲気大事やね、やっぱりクラスづくり学級経営ってやっぴりなあって、そんな学級プラス学校つくれたら、みんなは明日も行きたくなる学校に繋がっていくだろうし、いじめの件数も認知件数も減るだろうし、学調も

委員

上がるだろうし、そんなうまいこといけへんかもしれへんけど、何かそういうね、理想やて言われたらそうかもしれんけど、でも、その理想に近づけるために、具体的に何やっていくのか。そういう話もまたね、この場でできたらなあと思いますので。はい。いかがですか。

ちょっと端的にまとめますけど、英語教育について、一言ちょっと申し上げたいです。英語教育というのはですね。受験英語は違いますよ。英会話については、やはり習うより慣れろということが大切だと思います。

習うより慣れろですよ。じゃあ、今の学校教育において、ガチガチに決められたカリキュラムの中でね。英会話に慣れるというALTの授業ありますけれども、別として、カリキュラム以外の、例えばですよ、私の考え。私がもし教育の職員だったら、ちょっと考えたいことがあります。

休み時間を英語に慣れるための有益な時間帯に使えないかという思いは前からあります。休憩時間。どういうふうにやるかということ、廊下にですね、友達の今日の体調を聞くようなフレーズを書いてあげておくんですよ。今日の体調どうだい。それに対する答えは、ネイティブに言わせると、4通りも5通りもあるんです。アムファインだけじゃないんですよ。アムエキサイティングもそうだし、アムエネルギーでもいいですね。

そういうことのフレーズ、短いワンフレーズに慣れていくと、そのフレーズの積み重ねが英会話になっていくんです。そういうことができないかと。これは多分日本の学校ではどこもやってないと思います。そういうことを河南町でいちど、教育長まとめてあげていただければいいなと思って一案申し上げます。

1つの事例ね。私ちょっと迷ったことがあるんですよ。外国人に言われてね。買い物をするのに、ノータックスの税金フリーのところで、買い物で並んでいました。人気店ね。だから、並んでいました。

こう言った、外国人後ろから。アー、ユー、ラインって言ったんです。アー、ユー、ライン。LINE。一瞬、何言うてるのかなと思ったら、横のネイティブの方がね、日本語できる方が、あなた並んでいるかいつていう意味なんですって言うたんです。きちっと私並んでいましたから、ほんなら、イエス、アイ、アム、ラインでいいんですよ。私は並んでいます。だから、並んでいるから私の後についてくださいよつていう話でしょ。このアイ、アム、ラインなんていうのは、中学英語じゃないですか。単語的には、小学校でも習っているかな。アイ、アム、ラインなんて、そうでしょ。ところが、いきなり言われたらわからないんですよ。

もう1つ、簡単な話します。エレベーター乗ろうとして、やっぱり並んでいました。これも僕、実際体験しました。

後ろから外国の女性が、アフター、ユーって言っています。私はひらめきました、一瞬ね。アフター、ユー。アフターは後に、後ですよ。ユーはあなたですよ。あなた、後でやから、外国の女性はそう言っているのだから、私に対して、私が前に行くから私の後ろにつけよというふうに、僕は一瞬理解した

	んです。アフター、ユーやから。そうですね。あなた、後につけ。 だから、言った本人の後に僕はついたらいいなと思って、並びかけたんです。ノーノーノーって、言うわけですよ。で、たまたまね、英語に詳しい友人がおったから、アフター、ユーというのは、お先にどうぞってという意味なんですね。全然、思いつけへんでしょ。お先にどうぞなんですよ。 だから、後ろから、アフター、ユーって言われたら、もう遠慮せずにその人の前に行っていいわけです。もう、簡単な英語なんですよ。アフター、ユーなんて。だけど、会話の場合、いきなり言われたら、絶対これ大人でも理解できない、戸惑う。そういうことなんです、ほんまに。 簡単なフレーズ、単語を合わせて、会話っていうのは成り立っているから、それを遊び時間に、本当に、今日のテーマは、友達の体調を聞いてあげよう。それに対する答えは、こうやでというのを、大きく張りあげて。廊下ですれ違ったときに、友達に、アイム、ファインって時に、子どもはいくつもの答え方を覚えて、それに対してトレーニングしていく。それがね、僕は、英会話を習わすための大きな道で、やはりトレーニングだと思います。僕はやっぱり会話というのは、シャワーを浴びるように浴びろというふうに僕は、今、子どもたち、自分の孫たちにも言っています。ラジオ聞け。映画見て、英語のね。字幕ある英語画像を見るようにしなさい。そういうものを見なさいというふうに僕は子どもたちに言っています。 それをぜひぜひ、日本のどこの学校もやってないと思いますので、遊び時間を、英会話。慣れさせるためのミニトレーニングね。1時間休憩あるんですかね。その中のたとえ10分15分。廊下ですれ違った友達に、ワンフレーズの会話を交わすという、そういうことをちょっと来年できないかなという提案です。
教育長	どんどんどんどん提案をしていただいたらと思います。全部できるかどうかわからへんけれど、学校とも共有しながら、やっている例っていう部分もあるやろうし。
委員	英語の歌もすごい小学生に教えてくださって、うちの子どもが英語で歌を歌ったりしてすごくうれしかったりとかもあって。その活動を休み時間に取り入れるのはちょっと難しい面もあるかなって正直ちょっとごめんなさい。思ってしまったんですけれども。 何か、今日の昼休みはそれこそ英語版のアニメの映画をちょっと流すとか、水曜日は15分だけ英語のストーリーズが流れてみたいな、そんなのがあってもいいのかなっていうのは思いました。 すごくやっぱり耳から入れて、子どもに入っていくのって大人と全然スピードが違うので、そういう機会を作ってあげるってのはすごくいいのかなあって思いながら、はい。
委員	石川こども園入ったところにモニターがあって、2歳児か3歳児ぐらいやっ

	たかな。
教育長	何回か見ましたね。
委員	英語の勉強ね、見ました。もうほんまに、自分で表現して。あの子らの発音の方が綺麗。
委員	そこが、小学校上がるとやっぱり止まっちゃうと、子どもって忘れてしまうわけじゃないのかもしれないですけど、今の生活にすごく適応していくから、小学校で取り組むというのはすごくいいんじゃないかなって思いました。
教育長	似たようなことやってないかな。
事務局	その昔、水曜日のABCタイムって、かなん桜でやっていたんですが、すべての校内放送を英語でやるっていう。ただ難しいのは、休み時間っていうとらえか、業間というのとらえかで、またそれが変わってきて。 中学校の場合は業間なので、次の時間への準備。小学校は休み時間ですけど、基本的には次の授業の準備の時間帯なので、そこをやるっていう案。 今働き方改革が叫ばれていて、小学校の先生って10分の休み時間にもものすごい早さで丸付けとかをするわけです。例えば、英語のボタン押すの誰がやるんか。結構、それを教頭さんにまわってくると、結局、教頭の業務増えるよねっていうことで、難しい部分あった。 ただ好事例としては、近つ飛鳥の教頭は、去年までは英語専科で小学校に行っていたんですけど、彼は何していたかっていうと、休み時間に廊下を歩き回ってすれ違う子どもと英語で会話をしていました。これが委員の話にすごく近いかなと思います。 だから、その担当教員が、自分ができる範囲で子どもたちにどうやったらいけるかなということを考えることがすごく大事だと思うんで。 ただ、近つの教頭が、去年まで廊下に出ていたときは、ほぼ日本語しゃべってなかったです。ハウ、アー、ユーと、今、言ったようなことを返して、廊下にもたくさん貼ってあって、そこまで連れて行って、これわかるかなと英語でやり取りする感じだったので。各々の担任の意識が変わるとちょっと変わる。ただ無理なく、無駄なく、その辺の妥当なラインを探っていけないといけないかなと。
教育長	A L Tもそれやってくれるような人が来たら一番いいけどね。
事務局	近つも、桜も、おそらく下校のときに、A L Tが下足前に立っている姿をよく見るので。そこで、よく英語でバーイというだけでも。例えば、今までさよならって言っているのが、バーイとか、ちょっと発音が。今、言っていた英語

	のシャワーを浴びせられるかなと思うので、それもうまく活用できたらなと思います。
教育長	目で見ると言うので言うとね、見たことあるかな。階段のね。ステップのところにね、いろんな英語の言葉があったとか、九九ある学校もあったかな。要はそういうような工夫も、今まで過去ずっと振り返ると、いろいろやってやっていた。
委員	ローマ字が多かったかな。ローマ字の勉強。
教育長	そこにハウ、アー、ユーがあっても、おもしろいかな。 非常にいい、皆さんのご意見もいただいて、共有できたかなと思います。ありがとうございます。他よろしいですか。 時間もありますので、5 番目、その他、事務局から。
事務局	生涯まなぶ課からなんですけども、本年度も、令和 7 年度イングリッシュキャンプの募集を開始させていただきます。目的としましては、ネイティブスピーカーと一緒に英語でコミュニケーションをとりながら様々な活動と一緒にを行い、異なる文化習慣等に触れ、英語や異文化に対して興味関心を高めるということで実施させていただきます。 日程の方につきましては、多分もうご存じだと思うのですが、令和 8 年 3 月 20 日、金曜日、祝日、春分の日ですね。から、21 日次の土曜日です。1 泊 2 日で行います。 場所の方につきましては、去年と異なりまして、大阪市立信太山青少年野外活動センターという形で、信太山の方に場所を移しまして、今回実施させていただくという形で、はい。予定しております。 対象者につきましては、町内在住の小学校 5・6 年生及び中学校 1 年生の 3 学年に対して募集を行う。定員の方につきましても 40 名を一応一定の規模としております。 募集につきましては、令和 8 年 1 月 6 日から 15 日までで、募集をかけさせていただいてということで、実施させていただきます。 2 月の定例会のときには、もう少し詳しいこととお話できるかと思います。
教育長	2 月、1 月じゃなくて、2 月
事務局	2 月の 20 何日ぐらいと思うんですけど。3 月じゃ多分こっちも先に行っていると思いますので。
教育長	はい。今の大きくね、場所と実施日時が大きく変わったこと。その辺、新しい取り組みになります。さっき、これ。21 日、土曜日って。中村こども園の卒

	園式。こないだ、これ一緒になっとなつてというのはわかったけど、それは仕方がないことやから。 これまたお時間許せば、委員の方もね、ご覧なつていただくような時間帯があればいいかなとは思いますが。ただ、21日は、中村こども園の修了式やから、2日目の様子っていうのは、あれ、今までもそうか、1日目のキャンプファイヤー的なやつにね、ご覧いただいたりしたことがあったので。そうでしたよね。今年キャンプファイヤーするかどうか。この時期やからわからへんけど、ね。寒いかもしれません。他よろしいでしょうか。
事務局	今年度、茨木市の学校の視察を入れさせていただいておったのですが、ちょっと先方さんと日程調整続けたんですが、調整つかずで、今年度ちょっと見送りという形にさせていただきたいと思います。
教育長	それこそ非認知とか、学力向上とかね。そういった部分での、先進地の視察っていうことをずっと、今年それが実現できると思っていたけども、やっぱりなかなか相手さんのあるところの日程調整って難しかったので、これも含めて、来年度はね。どっかいきたいなと思っていますので、お願いします。 では、無いようですので、以上をもちまして本日の議事日程はすべて議了いたしました。これをもちまして12月の教育委員会定例会を閉会いたします。 先ほど委員もちょっとおっしゃっていた。2学期を振り返っての場面で、結構フリーストークっていうか皆さん、こういう場合って言葉も非常に大事やっつてあるので、修正とかその辺はまた後日お願いします。 場所は、こちらと同じ大会議室南、おさえさせていただきます。

令和8年9月3日

教 育 長

署 名 委 員